

第3回 批判的言語教育国際シンポジウム 2025年8月8日（金）15：00～17：00 関西大学千里キャンパス C204
【ポスター発表&ディスカッション】『インクルージョンを推し進めると言語教育の本質が見える！』
植村麻紀子・池谷尚美・中川正臣・古屋憲章・山崎直樹

【ケース4】中川正臣（城西国際大学）

「みんなの前で発言や発表をしたくないのですが、、、」

あなたは大勢の人の前で発表したり、発言することは得意なほうですか？苦手なほうですか？

このケースのあらすじ

私たちは幼少期からクラスの中で、教師に発言を求められたり、発表を課されたりしてきました。そこにはどんな目的があったのでしょうか。それは必ずしも「大勢の人の前で」「口頭で」やるべきことなのでしょうか。このケースでは大勢の人の前で発言したり、発表したりすることに抵抗を持つような学生がいた場合、教師としてどのような対応をすべきか、その学習者の心の中も含めて考えていきたいと思います。

ケース：山川先生の悩み

30代

担当科目：日本語教員養成にかかわる科目

クラスサイズ：30名

ユウさん：日本語教員養成にかかわる科目を受講する学生

それでは、ケースを聞いてみてください。

同僚の堀越先生（20代）

ユウさんには徐々にクラス内で発表や発言ができるように手助けしていく必要があると思います。人前で話すのが苦手な人は昔からいますが、**場数を踏む**ことでだんだん**克服**した人もいます。その気になれば教室でリハーサルだってできるし、発表原稿を棒読みしたっていいと思います。とにかく少しずつでも苦手なことに**挑戦**することが大事ですし、**個人ができないことをできるようにサポートするのが教師の役割だ**と思います。

同僚の大澤先生（30代）

ユウさんに人前で発表させるのではなく、その代替手段として発表資料を作成し、それをクラスで共有したのはとてもよいと思います。山川先生がユウさんと丁寧に対話したからこそ見つけ出せた方法ではないでしょうか。ただ、発表する方法を個人の自由にとすると、様々な準備が教師の負担になり、疲弊してしまうのではないかと心配です。思い切って「できないならやらなくてもいい」と言ってもよいのではないのでしょうか。そうでなければ、大学には学生のケアと同じくらい教師のケアももう少し考えてもらいたいです。

同僚の三浦先生（50代）

グループ発表にしろ、個人発表にしろ、これをきっかけにクラスで個人が選べる**様々な発言・発表方法について考えてみる**のはどうでしょうか。そもそも調査したり、考察したり、自分の意見を述べたりしながら、タスクを遂行できれば、そこに至る方法はどのようなものでもよいと思います。せっかく教室にいるのだから口頭で情報や考えを発信したいという学生もいるでしょう。一方、紙媒体で発表内容を示したいという学生もいるでしょうし、リアルタイムではなく動画で発表したいという学生もいるかもしれません。**「得意な方法」を選べるようにすること**で他の学生も**意欲的に発表に取り組める**のではないのでしょうか。

問A.個人レベルの問い

Q1：山川先生がとったユウさんへの対応についてあなたは
どう思いますか。

Q2：山川先生と同僚である3人の声についてあなたは
どう思いますか。

Q3:あなたが山川先生と同僚だったらユウさんへの対応に
ついてどんな意見を述べますか。

問B. 学習空間レベルの問い

Q1：あなたが今、かかわるクラスや自分が学んだクラスを思い出してください。そこでは個人の得意、不得意が尊重されていたでしょうか。

Q2：個人の得意、不得意を認めることにどんなメリットやデメリットがあるでしょうか。

※「得意だけど嫌い」「不得意だけど好き」というケースもあるが、ここでは「得意なので抵抗がない」「不得意なので抵抗がある」ケースを想定する。

問C. 社会レベルの問い

Q1：学校や職場など、身近なコミュニティにおいて、個人の得意、不得意が認められ、不得意なことには代替手段が設けられていると言えるでしょうか。

Q2：個人の得意、不得意が尊重され、認められる学校社会は実現可能でしょうか。もし実現できたら、どんなことから改善が必要だと思いますか。

資料

2012年文部科学省「障害のある学生の修学支援に関する検討会」設置

➡その支援は個別事案ごとに判断すべきとし、**一般的・抽象的な理由に基づく対応を不適切**

➡障壁となって事物、制度、慣習などの**社会的障壁そのものを見直そうとする社会モデル**

社会モデルとは障害のあるものが日常生活又は社会生活において受ける制限は、心身の機能の障害のみに起因するものではなく、社会における様々な障壁（社会的障壁）と相対することによって生ずるものとする考え方です（独立行政法人日本学生支援機構, 2018: 93）

山川先生や同僚の三浦先生 ➡社会モデル
同僚の堀越先生 ➡医学モデル
と言えるのでは？

ただし、同僚の大澤先生の「もしできないならやらなくていい」という考えや発言には慎重にならなくてはいけない。

それぞれの大学の学科にはカリキュラムポリシーがあり、シラバスにもその授業の目標が設定されている。その目標の中に「自分の考えを伝えることができる」と記述されているのであれば、目標を達成できるように教育環境を整備していく必要がある。一律的に「できないのならやらなくてもいい」というのは合理的配慮ではない（独立行政法人日本学生支援機構, 2018: 20）。

教師の役割

シラバスに記載された科目の目標と各授業の目標に照らし合わせるとともに、クラスのみんなが能力を最大限発揮できる学習環境について考える必要性

➡「**やってあげる**」支援から「**自分で決められるようになる**」支援（独立行政法人日本学生支援機構, 2018：19）

アドボケイト

「障害のある者のように自らの権利を表明することが困難なものの味方として、ともに権利を主張し、擁護するために活動する人（独立行政法人日本学生支援機構（2018：91）」

合理的配慮が必要な学習者はユウさんの中学時代のように周りに理解されなかったり、多様な手法の中から自己決定した経験が少ないことも考えられる。

教職員が学習者の声に耳を傾けたり、代替案を示したりすることで、これまで学校や教室で当然視されたこと見直すことになる。

それは教職員はもちろん、学習者自身も **自分が当然視してきたことや合理的配慮のあり方、さらには公平な共生社会実現について理解を深め** ことにつながる。

言語教育の本質が見えてくる

漢字は手で書
かなければな
らない？



授業中にヘッド
フォンをつけて
はいけない？

言語教育におけるインクルージョンを推し進める

- 何が目標で、何が目的かの再認識
- 自分で決められるようになる学習環境
- 教師の役割の再検討 など

提出物の締め切
りやスケジュール
管理は支援す
べき？

初めの一步を踏み
出すのが困難な場
合、どんな足場か
けをするか？

授業ではみんなの
前で発言や発表は
すべき？